特定非営利活動法人（認定NPO法人）
パレスチナ子どものキャンペーン　2023年2月25日発行 no.125

サラーム

平和

食料支援のご報告
―1500世帯へ2週間分

みなさまのご支援で、レバノン山間部に住むパレスチナ人シリア難民とレバノン生まれのパレスチナ難民合わせて1,500世帯に、越冬支援として食料を配布しました。米、プロセスチーズ、ツナ缶、レンズ豆、ひよこ豆、白豆、パスタ、マカロニ、トマトペースト、植物油、紅茶、砂糖、ザータル（パンにつけるハーブ）、ハラワ（甘いゴマペースト）など、ふだん食卓に上り日持ちがするものです。5～6人の家族で2週間ほどの食料となる見込みです。

配布を取りに来た女性たち。夫や父のいない女性世帯主も多い（上）
配布した食料（左）

首都のベイルートでは、昼間は10度近くまで気温が上がりますが、山間部は天気が良くても最高気温は5度前後、夜間は零下になります。悪天候が続いたため、峠越えをする道路が凍結して閉鎖されるなどがあり、日本人駐在員が配布現場を訪問できたのは1日だけでした。

寒さの強い中ですが、配布が始まる前から多くの人が行列して待ってくれていました。人々の期待感をひしひしと感じます。

山間部にはシリアから逃れてきた人たちや元からレバノンに住むパレスチナ人が多く住んでいます。身分証明書を提示してもらって配布者のリストと照合し、食料の入った段ボール箱を手渡します。皆さん口々に感謝の言葉をくださいました。

「食料配布は家計にとって大きな支えになります。日々状況は悪くなっているので、何年も前から希望は無くなりました。2023年になったからといって特に気持ちは変わりません。燃料や薪が高いので、プラスチックごみを買って燃やして暖を取っている人が多いのですが、うちには喘息を抱える家族がいて、プラスチックを燃やすことはできません」と6人家族のファルークさんは言います。「ご支援を継続していただけたらと願っています」。

ファティマさんの夫と子どもたち　家の中は寒く外と同じ服装をしている

やはり6人家族のファティマさんは、「ふだんは安くなっている不揃いのジャガイモしか買えないので、煮たり焼いたり揚げたりして食べています。今回もらった食料で、変化をつけた食事を作れます。ありがとうございます。停電が続いても自家発電機は非常に高額で買えません。それで子どもが勉強するときは携帯電話で照らします」。レバノン中で、1日に2時間しか電気が来ないのです。